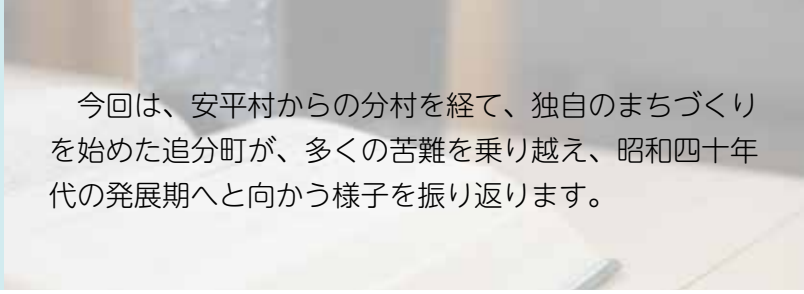
町史編さん室だより

令和９年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ　総務課町史編さん室　☎㉒2511



今回は、安平村からの分村を経て、独自のまちづくりを始めた追分町が、多くの苦難を乗り越え、昭和四十年代の発展期へと向かう様子を振り返ります。

第十一回　初期の追分町のまちづくり

追分町の誕生

昭和二十八年十月一日、追分町が誕生した。

前年の分村後の選挙で初代村長となった尾崎利明は、首長として一期で町制執行を成し遂げ、初代の町長として町を築きはじめた。

昭和三十年の国勢調査では、人口は六六三三人。分村時の六二三五人から町制施行時には六五六六人と、昭和三十四年頃まで順調な人口増加を示していた。

就業者の七割近くが農業と鉄道・運輸関係に従事する者で占めており、住民の高齢化率は四％以下。若い世代が町の発展を支えていた。

農業・畜産業

追分町は、農業振興を重点施策に置いていたが、当時の農業は冷害と凶作に見舞われる厳しい環境下にあり、農業協同組合や農業共済組合も運営資金が乏しく、関係者は窮地に立たされる状態であった。そこで町は損失補償や搾乳牛購入への債務補償を行った他、昭和三十一年から五か年の「追分町農業振興計画」を策定して、農業者を支えていた。

昭和四十五年頃から始まった米の生産調整では、麦やアスパラガスへの転作などが行われると同時に、旭地区を中心にしたメロン栽培の研究も進んでいた。これが現在も市場の好評価を得て農業振興の中心となっている「アサヒメロン」の誕生である。

さらに、町内の旧北炭社有林を買収し、国営農地開発事業による大規模農地造成が行われ、酪農家の入植や既存の農家の規模拡大が行われた。これにより、乳用牛や肉用牛の飼養が増え、軽種馬の飼育も行われるなど、酪農業や畜産業の振興も進んだ。

商工業

町制施行を契機に、商工業の発展も進めようとする気運の高まりで、商工会の再建強化が進められた。

昭和三十年三月の臨時総会で選出された役員によって、駅前の鳥瞰図の建設、大通りへの街路灯の設置、信用金庫の支店誘致などが進められ、年末年始や中元大売り出しの事業も行われた。

昭和三十六年に追分町商工会は法人化され、商工振興体制の強化と発展が進んだ。

交通・通信

追分町は、北海道の石炭輸送を担う「鉄道のまち」として、追分駅に機関庫が設けられるなど、交通の要衝として重要な役割を果たしてきた。一方で、交通運輸は馬車から自動車へと移り変わり、道路や橋りょうの整備が進んでいた。

現在の国道二三四号線（岩見沢ー苫小牧）は明治三十四年に由仁から早来に通じた道路で、延伸後も三川ー追分間の五・一㎞は屈曲していた。直線化を行うため、北海道開発局は昭和三十六年から五か年計画で、安平川に「追分橋」を架設し、国鉄線（鉄路）をまたぐ新国道に跨線橋が整備された。

通信手段を担う追分郵便局は明治二十九年に開局し、当時は広範囲の集配区域を担っていた。

町制施行時は町内の通常郵便、郵便為替、貯金業務だけでなく、電話交換業務や電信業務もあったが、昭和四十七年に無人自動交換局が追分に建設され、翌年には交換業務が廃止された。

行政・財政

町制施行直後は、役場の増築や公営住宅建設、学校の増改築、道路整備、農業の基盤整備などの事業が重なり、昭和三十一年度の一般会計は赤字決算となった。

町は赤字解消のため、昭和三十二年度から四年間の財政自主再建計画を策定。議会の同意を得て財政の健全化に取り組み、一年早く赤字財政は解消された。

財政が安定してきた昭和三十年代末期には火葬場、墓地の整備、塵芥焼却炉などの工事が行われ、消防施設の整備や消防自動車の購入などが行われた。

昭和四十年代には、計画的にインフラ整備が行われ、農業経営の基盤安定策や道路整備、教育環境の整備（学校施設の建設、スクールバス運行）、さらには簡易水道事業の完成や住宅団地の造成なども行われ、安定した財政運営の中で住み良いまちづくりが進んだ。

教育・文化

町内の学校は、昭和二十二年の学制改革で、国民学校から小学校となった追分、本安平小学校の二校と追分中学校があった。

追分中学校は昭和四十三年十月に校舎全焼の災害があり、その間は小学校での授業が行われたが翌年十一月に新築落成している。

昭和二十六年度、住民の悲願で、定時制の追分高等学校が設置され、昭和二十八年度に通常課程が認可。追分高等学校ＰＴＡの請願など三年余りの活動が実を結び、昭和三十三年度に北海道立追分高等学校となる。昭和三十八年には普通科は三間口、家政科一間口の高校へと拡大され、現在も多くの卒業生を輩出している。